

岡山県立

博物館だより

71号

- 館長室より …………… ②
- 博物館 NEWS …………… ③
- 特別展を終えて … ④⑤
- 交流展を終えて …… ⑥
- 教育普及事業 …… ⑦
- 学芸員ノート …… ⑦
- INFORMATION …… ⑧



〈特別展より〉 岡山の庶民信仰 関連事業 北木島の流し雛を作ってみよう



〈交流展より〉 (右上) 青備前 鶏置物
(左下) 一角 印籠



〈特別展より〉 太刀 銘長光

県立博物館 UD 化推進計画

県立博物館では、入館者の方々にアンケート調査の御協力をお願いしています。昨年は年間入館者の約15%、およそ6千人の方から回答をいただきました。調査票は毎日ごとにまとめて、全職員に回覧した後、月ごとに集計を行って、毎月初めの館内会議で分析結果が報告されます。

アンケートの内容は展覧会の満足度や今後希望する展覧会をお尋ねするほか、気づいたことを自由に書いていただくスペースを設けています。「説明が解りやすい」、「学芸員の解説が良かった」等の好評価がある一方、「展示物が少ない」、「キャプションの文字が小さく読めない」などの御意見の場合もあります。様々な御提案については、改善できる部分は、直ちに、あるいは、時間をかけて工夫を重ねる事柄もあります。中でも対応に苦慮し、頭を悩ませる御意見がよせられます。「階段がつかなくて上がれない」、「エレベーターかエスカレーターの設置を」とか「トイレを洋式に」、また「授乳室がない」など施設の不備や不足を指摘される方々の御意見です。

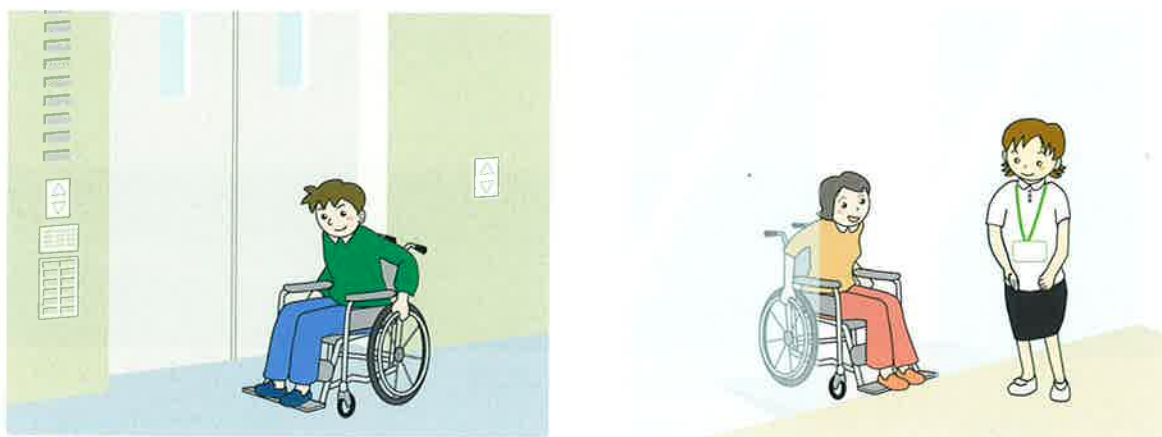
県立博物館は、昭和46年に開館して以来36年が経過し、施設・設備の老朽化が進み、施設機能や規模の面でも十分な役割や機能が果たせてない状況です。特に、施設のバリアフリー化に関しては、本県のユニバーサルデザイン推進指針にほど遠いものがあります。

このような中、当館では、平成18年度から19年度にかけて、本県の「福祉のまちづくり条例」や(財)日本博物館協会が作成した「誰にもやさしい博物館づくり事業」の調査報告を参考にしながら、UD化推進計画の作成に着手しました。計画は3カ年計画でエレベーターや玄関の自動ドアの設置、来館者用トイレや受付カウンター改修、点字ブロックの敷設などを盛り込み、平成20年度の予算要求をしました。

本県の大変厳しい財政状況から、事業の予算化は困難かと思いましたが、県教育委員会や財政当局の理解もあり、平成20年度はエレベーターと玄関の自動ドアの設置が認められ、既に工事は完了しました。よせられた御意見のいくらかは解消できるのではないかと考えています。また、平成21年度は、昨年、県知事から「財政危機宣言」がなされ、「財政構造改革プラン」に基づく最初の予算であり、予算措置について心配しましたが、来館者用トイレの改修が認められました。

平成22年度以降のことはわかりませんが、多くの方々の御支援により、ハード面でのバリアフリー化は格段と進み、来館者の利便性は向上すると思われます。今後、私たちが心がけることは、障害のある方や高齢者、さらには外国の方々が博物館を訪れたとき、今まで以上に、受付の職員が笑顔で挨拶をしたり、丁寧でわかりやすい展示に努めるなどソフト面の充実を図ることです。訪れた全ての方々に「博物館は、利用しやすい施設であり、快適で楽しい時間を過ごせた」と感じていただける取り組みを進めていきたいと考えています。

(館長 芦田和正)



施設のUD化事業

本館では今年度から3年計画でUD化推進事業を進めています。今年度は、エレベーターの設置と入り口の自動扉化及び、点字ブロックの敷設を行いました。今後、来館者用トイレの改修などを進めていく予定で、博物館の利便性の向上に努めていきます。

【特別陳列】「足守藩主木下家資料—豊臣ゆかりの大家に伝えられたもの—」

会期：平成20年10月18日（土）～11月9日（日）



足守藩主木下家に伝来した歴史資料のうち、近年再確認された貴重な資料を一堂に展示しました。特に、豊臣秀吉の夫人、北政所の遺品とされる「鳳凰蒔絵硯箱」（岡山県初公開）をはじめ、鼈甲や螺鈿による華麗な装飾が施された「子の日御琴」や重厚かつ豪華な甲冑などの優れた品々には、来館者の多くから感嘆の声が寄せられました。

【特別陳列】重要文化財指定記念「明王寺の木造観音菩薩立像」

会期：平成20年12月19日（土）～平成21年2月1日（日）

明王寺（岡山市竹原）所蔵の「木造観音菩薩立像」は平安時代初期の作風をよく示す貴重な仏像として、今年度国の重要文化財に指定されました。これを記念して、明王寺の御協力により実現したこの展示では、豊かな量感や細かな表現をもつすばらしい仏像を紹介することができました。



平成20年度文化庁芸術拠点形成事業（ミュージアムタウン構想の推進）

岡山・香川合同企画文化交流展「備讃における工芸のあゆみ」展の開催に合わせ実施した次の事業については、文化庁の芸術拠点形成事業に採択されました。これらの事業について紹介します。



【学校教育との連携事業】

小学生を対象に、岡山県の備前焼や香川県の漆芸について解説した「鑑賞ガイド」を作成するとともに、本館では備前焼の陶芸体験（ワークショップ）を開催し、伝統工芸への理解を深める機会を提供しました。

【ボランティア交流事業】

岡山・香川の両県ボランティアと一緒に勉強会や現地見学会などの交流会に参加するとともに、両館での展覧会で展示ガイドを行い、来館者には大変好評でした。

（副館長 平井泰男）

「日本刀－赤羽刀と備前の名刀－」

会期：平成 20 年 9 月 5 日（金）～ 10 月 13 日（月）

鉄の芸術 日本刀

日本刀は、武器であると同時に高い芸術性を備え、日本の歴史や文化とも深い関わりをもつ稀な文化財です。本展は、かつて日本一の刀剣産地として栄えた岡山県で、日本刀の名品を御覧いただくことと企画したもので、文化庁と共同で開催しました。

展示では、貴重な歴史遺産としてよみがえった赤羽刀あかばねとう（第二次世界大戦後、連合軍司令部に接収された刀剣のうち、東京赤羽に集められたもの）や、郷土ゆかりの備前刀、県内の社寺に奉納された刀剣、人間国宝をはじめとする現代刀匠の作品など、国宝 2 口・重要文化財 12 口を含む計 70 口の名刀を一堂に陳列しました。これだけの規模で日本刀を紹介するのは当館でも十数年ぶりのことで、会期中の入館者は 7,519 人と大盛況となりました。



広報用ポスター

キャッチコピーは「日本の美と技と心がここにある」

日本刀の美しさは、武器としての機能を極限まで高めた結果生まれたものであり、そこには匠の技と武士の心が込められている、という意味を込めました。

日本刀がもっと好きになる! 多彩な関連事業

本展では、日本刀への興味を深めてもらうため、展示と連動した関連事業にも力を入れました。「記念講演会」では、全国有数の名刀コレクションで知られる佐野美術館のわたなべたえこ渡邊妙子館長に、備前刀の伝統と魅力について、詳しく分かりやすく講演していただきました。「居合道の演武」では、全国トップクラスの実力を誇る岡山県剣道連盟居合道部により、迫力ある剣技の数々を御披露していただきました。「刀身研磨・刀身彫刻などの実演解説」では、日本刀の職人たちの技能集団である備前刀職匠会により、驚くほど細やかな匠の技を間近で見せていただきました。「刀匠による特別解説」では、岡山県指定重要無形文化財保持者のあんどうひろきよ安藤ひろ清氏により、刀匠ならではの日本刀づくりの話をお聞きすることができました。



「居合道の演武」の様子



「刀身研磨・刀身彫刻などの実演解説」の様子

日本刀のことをもっと知って欲しい!

日本刀は、熱心な愛好者がおられる一方で、何だか怖い見方がよく分からない、という御意見もよくお聞きします。たしかに日本刀は武器であり、鑑賞方法も難しいのですが、食わず嫌いはもったいない! 日本を代表する文化財の一つである日本刀のことを、もっと多くの方々に知ってもらいたい、知ればきっと好きになる。このような思いから、展示内容や方法について何度も検討を重ねました。

幸い、文化庁をはじめ所蔵者の皆様の御高配により、素晴らしい名刀を集めることができました。展示では、これらをじっくり鑑賞していただけるよう配置や照明を工夫しました。また、初めての方でも日本刀の見方が理解できるよう、図解パネルやビデオ映像などを用意し、わかりやすい説明文を心がけました。さらに、実際に日本刀（模造刀）を持つことができる体験コーナーを設けました。このような取り組みを通じて、日本刀の魅力をより多くの方々に知ってもらい、ファンになっていただきたいと思えます。今後も、いろいろな切り口で日本刀の展示会を企画してまいりますので、どうぞ御期待ください。

(学芸員 佐藤寛介)

「岡山の庶民信仰—くらしの中の神・仏—」

会期：平成 21 年 2 月 6 日（金）～ 3 月 8 日（日）

開催にあたって

現代は科学の進歩し人々の生活は豊かになりましたが、人間関係の希薄な時代といわれます。しかし、人が家族や周りの人々の幸福を願う気持ちは今も昔も変わることはなく、願いをかなえるために神仏などに祈りをささげてきました。病気のときは早く治るように祈願したり、雛人形や五月人形を飾って子どもの無事成長を願ったりすることは、現代でもごく普通に生活の中にとけ込んでいる祈りの形です。私たちは、生まれてから死ぬまで神仏をくらしの中に何らかの形で感じているのではないのでしょうか。本展では私たちに身近な信仰の形を紹介しました。

広報用ポスター



展示は8つのテーマで構成

展示は、複雑な様相をみせる庶民信仰を人々の神仏に対する「納める(奉納する)」「供える」「飾る」「祀る」「(身に)付ける」「呪う」「拝む」「参る」という8つの行為に分けて構成しました。展示室には、加茂大祭(岡山県指定重要無形民俗文化財)の御神輿や今回岡山県で初公開となる金沢市の真成寺に伝わる『真成寺奉納産育信仰資料』(重要有形民俗文化財)から「百徳」や「奉納額」「柄杓」など、バラエティに富んだ展示資料が並びました。また、岡山県教育委員会が平成 17・18 年度に行った「岡山県の会陽の習俗」総合調査の成果も初公開資料を含めて紹介するとともに、絵馬や雛人形の起源についてトピック展示しました。

観て・聴いて・体験して親しむ展覧会

子どもから大人まで楽しめる展覧会をめざして様々な関連行事を会期中に行いました。岡山民俗学会理事長次田圭介氏による「年中行事にみる庶民の祈り」と題した記念講演会では 165 名の聴衆が長年の地道な民俗調査に裏付けされたお話に聴き入りました。同学会名誉理事長立石憲利氏は、特別解説で資料解説に加えて資料にちなんだ昔話も聴かせてくださり、展示室は温かな雰囲気にもまれ約 70 名の観覧者は大いに満足されていました。加茂大祭で神々に奉納されるお遊び行事「太刀

振り」「獅子舞」「棒使い」は 2 階ロビーと玄関前で行いました。普段は 10 月の祭りでしか観られない行事を松尾神社芸能保存会の方々の実演して下さり、約 250 名の観覧者がその迫力に圧倒され祭りの雰囲気十分に味わいました。北木島の流し雛(笠岡市重要無形民俗文化財)を作る行事には 106 名の参加がありました。北木島流し雛保存会の方々流し雛を紙芝居で紹介し、小麦わらでウツロ舟作りを実演された後、参加者の流し雛作りを指導してくださいました。家族で祈りをこめて雛を作る姿はほほえましく、作った雛は 2 階ロビーに展示し、3 月 29 日(旧暦 3 月 3 日)に北木島で流しました。



「加茂大祭お遊び行事『獅子舞』」の実演



展示の様子



記念講演会

展覧会を終えて

本館は、会期中 4,693 名の方々に御覧いただき、「普段耳にしている何気ない風習がこんなに奥が深いものとは知りませんでした」(10 代女性)「岡山に生まれ育ったにもかかわらず初めてみるようなものばかりで失われつつある「宝」と出会えた」(10 代男性)「幼い頃参加した村の行事の由来を知る事が出来ました」(70 代男性)「現代人が忘れた地域社会のつながり維持の知恵や子を思う親のやさしい気持ちのあらわれを感じた」(50 代男性)などの感想が来館者から寄せられました。

本展は、神仏に対して普段何気なく行っていることや年中行事、寺社などで目にする事物の意味を改めて考えるきっかけとなり、資料に息づく人々の思いに触れていただく機会になったのではないかと思います。県下には今回御紹介できていない信仰の形がまだまだあります。それらを調べ伝えていくことを今後の課題したいと思います。

(学芸員 信江啓子)

「備讃における工芸のあゆみ～幕末・明治から現代へ～」

会期：平成 20 年 11 月 14 日（金）～ 12 月 14 日（日）

交流展を終えて

岡山県立博物館と香川県立ミュージアム（旧香川県歴史博物館）は、平成 18 年度より交流事業として互いの館蔵品の交換展示やボランティアガイド・学芸員の交流を実施してきました。最終年にあたる今年度は瀬戸大橋開通 20 周年の記念すべき年でもあり、これまでの交流事業の集大成としての巡回交流展を開催しました。先行の香川会場では、10 月 4 日（土）～ 11 月 9 日（日）の期間開催され、多くの工芸ファンが来館されました。

続く岡山会場では、11 月 14 日（金）に開会式が行われ、香川県の誇る漆芸作品、岡山県の備前焼、金工作品などが多くの来館者を魅了しました。今回の交流展は文化庁の芸術拠点形成事業として、ボランティアによる展示ガイドや子どもたちへのワークショップも行いました。当館では備前焼の土ひねりの体験と作品づくりが行われました。備前焼の窯元より講師を招き、子どもたちは一生懸命に作品を仕上げました。ワークショップに合わせ、展示も見学し、今回作成した鑑賞ガイドを手で工芸品を鑑賞しました。



讃岐と備前の工芸品を鑑賞

今回の交流展は、これまで交換展示をしながら研究を重ねてきた岡山・香川両県の伝統工芸に着目し構成しました。幕末から明治にかけ失職した職人の中からすぐれた技術で美術工芸品を制作する者があらわれます。万国博覧会への出品をとおして日本の技術は高い評価を受け、その後もさまざまな変遷をたどりながら工芸品は磨かれました。備前焼のように長い低迷の時代をくぐりぬけて再興なった伝統美もあります。両県の金工、香川県の玉楮象谷にはじまる漆芸、岡山県の備前焼、蘭草など博覧会で高い評価を受けた日本の技と美を紹介しました。現代作家を含め、多くの工芸作品に触れることができ、来館者に喜んでいただきました。また、その技と美をとりまく環境や素材確保という視点にも着目し、後世への伝承を考えました。会期中の入館者は 3,855 人となり、香川会場ともあわせ、多くの方々に工芸の美にふれていただけたのではないかと思います。

広報用ポスター

基本デザインをあわせて、両館でちらし、ポスターを作成。交流展図録も両館で協同執筆しました。



関連事業と交流展実現まで

本展では、文化庁をはじめ多くの支援をいただき県外からも多くの作品を紹介することができました。今回の借用先でもある東京国立近代美術館の工芸課長である金子賢治氏には記念講演会で御講演いただきました。また、香川県漆芸研究所で学ばれた漆芸の岡山県指定重要無形文化財保持者である山口松太氏には特別解説もしていただきました。さまざまな方々の御協力のもと開催することができたと思います。今日までの両館の取り組みはこの交流展を通して、この瀬戸内という文化圏に確かな足跡を残すことができました。3 年間にわたり、



記念講演会



特別解説



香川会場ボランティアガイドの様子

ボランティアガイドや学芸員が何度も瀬戸大橋を渡り、交流と研究をすすめました。実際にガイドを体験された方々も「今年度は特に勉強する範囲も広く、大変だったが充実した活動であった」と話されていました。



備前焼鑑賞ガイド（裏面は漆芸）

これだけの規模の展覧会をどのようにすすめるか、2 年あまりの準備期間中、幾度も壁にぶつかりました。両館の学芸員が一丸となった今回の交流展の成果を次につなげていくことが技と美の継承の一役を担っている私たちの使命ではないかと改めて感じています。今回の交流展に貴重な資料を快く御出品いただきました作家の皆様、関係機関の皆様には厚く感謝申し上げます。

（学芸員 鈴木力郎）

教育普及事業の概要

当館においては、近年、教育普及事業の推進を積極的に図っています。平成20年度下半期の主な事業は次のとおりです。

■館内授業・出前授業

館内授業は当館で実物資料に触れたり、解説を聞きながら展示を見学したりして行う授業です。出前授業は学芸員が資料を持参して直接学校に出向き授業を行います。今年度下半期は前者29校、後者11校、年間で計63校で実施しました。



■職場体験・学芸員実習

中学2年生を対象とした職場体験について、本年度は4校、16名の中学生が、学芸員や受付・看視等の仕事を体験しました。

2月には学芸員を目指す県内の学生10名が専門分野に関わる実習と博物館活動支援実習を行いました。

■吉備の国歴史探検ツアー

10月23日、鏡野コースを実施しました。午前中は美作市長福寺、午後は当館を見学しました。



3月には、3年間の成果をまとめた報告集を作成し、県内の小中学校や図書館などに配布しました。

子どもたちの生き生きとした表情、素朴な感想、一生懸命描いた作品が掲載され、館内や当館HPでも御覧いただけます。

(主幹 正木茂樹)



学芸員ノート

甦った! 錦莞菴織機

この織機は、明治時代、磯崎眠亀が錦莞菴(精巧で美しい花菴)製作のために発明した織機です。昭和53(1978)年に当館は、眠亀旧宅に解体保存されていた織機の部材を復元し、保存してきました。今回、当時の職人さんがこの織機で錦莞菴を織って以来、30年ぶりに織機が動きました。錦莞菴の再現をめざす「備中西阿知花菴グループ」の方々が特許図面などを手がかりに試行錯誤の結果、製織に成功しました。現代の藁草の質などが当時と異なり明治時代の錦莞菴と同じものが織れたわけではありません。しかし、織機が再始動したことは大きな成果であり、錦莞菴の再現も近い将来実現するのではないかと期待しています。(学芸員 信江啓子)



実演の様子

錦莞菴が出品された『岡山・香川合同企画文化交流展 備讃における工芸のあゆみ』の会期中、約220名の方々に御覧いただきました。

(撮影: 蜂谷辰夫氏(博物館友の会スタッフ))